アルツハイマー型認知症の一つの“こころ”の変化についてのお話の後編です。
あくまでも創作であり、必ずしも現実を反映しているとは限りません。

病院を受診した。母はどこに来たのか分かっていないようだった。案の定、アルツハイマー型認知症と診断された。分かってはいたがやりきれない思いがこみ上げた。
中期であり急速に認知機能が悪化する時期で、精神的にも不安定になりやすいこと、不安や猜疑心が出てくることが多く、相手の心情を想い量る能力も失われてくるので被害的になりやすいこと、理屈が通らず感情の強度は強く伝わるので、家族が感情的になると火に油を注ぐように攻撃的になることなどを説明された。治療は少量の薬物療法と、介護保険を申請し、週3回のデイサービスを受けることとなった。また私に用事があるときにはショートステイを使うこととした。
誰にも言えなかった「やりきれない思い」も、ケアマネ、看護師、介護士、医師など様々な医療関係者が自分の思いを聞いてくれたことで、少しずつだが消えていくように感じた。

週3回のデイサービス、時々ショートステイを利用していた。毎朝身支度をし、デイサービスの迎えを待つのが日課だった。散歩やゲーム、絵を描いたりと、仲間との和やかな時間が過ぎていた。規則正しい生活や運動は自分に活力を与えてくれてくれるように感じた。あれほど喧嘩していた長女とも、お互いの時間が増えたからかあまり喧嘩をしなくなった。TV や新聞も観なくなり、世の中の動きに想像を巡らせることはなくなったが、よく知っている満面の笑顔や声、降り注ぐ光の揺らぎや風の心地よさ、そういった目の前の穏やかな日々の断片は私を安心させ、寄る辺ない蟻地獄から私を解放し、自分を中心に世界が回っているかのような心地よい感覚を与えてくれた。

3 年が過ぎた。

母は食事、着替え、入浴、清拭、排せつなどあらゆる場面で介助が必要になっていた。排せつの失敗も増え、その度に溜息がでることもあるが、同居当初のように喧嘩したりすることもほとんどなくなっていた。
母はかつて教師をしていたこともあり、私は厳しく育てられた。礼儀や言葉使いは勿論、様々な稽古事にも通わされていた。そんな母を尊敬していたが、時に口うるさく感じることもあった。そんな母が、厳しく自分を導いてくれた母が認知症になり、トイレさえも満足にできなくなっている。
同居を始めた時には感じることはできなかったが、今は、人は誰しも老いること、そして自分も老いていくこと、この繰り返しで連綿とした歴史が紡がれていることを感じることができる。

今年も庭に桜が咲き、そろそろ散りつつある。
庭を眺める母は何を思っているのだろう。
ゆらゆらと揺れ落ちる花びらをいつまでも母と眺めていた。

完